みんなのお金のアドバイザー協会
FIWA通信
インベストライフ®

2022年6月12日

今月のひとこと

【Vol.234】今月のひとこと

今月のひとこと

岡本 和久 CFA, FIWA

「神よ、変えることのできない事柄については冷静に受け入れる恵みを、変えるべき事柄については変える勇気を、そして、それら二つを見分ける知恵をわれらに与えたまえ」これはアメリカの神学者、ラインホルド・ニ―バー（1892～1971）が1943年にマサチューセッツ州の教会で行ったといわれる講演の一部です。まさに「生き方」に関する素晴らしい言葉だと思います。そして、生き方への示唆は資産運用を実践する上で理解すべき重要な事柄でもあります。

資産運用ではコントロール「できること」と「できないこと」があります。コントロールできないことの代表は「リターン（収益率）」です。リターンが思い通りにコントロールできれば何の苦労もありません。しかし、コントロールできることもあります。それらはリスク、コスト、資産配分です。これらは自分の意思で変化させることができるのです。

リスクというのは不確実性です。一銘柄だけ持っていると株価の振れ幅は大きい。しかし、保有銘柄を増やしていけば株価の動きがお互いに相殺しあって振れ幅はマイルドになります。

コストはまさに資産の流出です。当然、投資をするにはコストが掛かります。本当に意味のあるサービスや商品を買うのはよいのですが、そうでないことも多いのです。また、税金もコストです。非課税口座があるのに課税口座で投資をしてしまう。

そして資産配分というのは株式のようにリターンの変動の大きい商品を資産全体のなかでどれぐらい保有するかという決断です。例えば株式を多量に持ってしまうと、資産運用の長旅の途中で暴落などに遭遇すると大きなダメージを受けてしまいます。しかし、変動の小さい投資対象ばかりを持つとリターンもゼロに近づきます。つまり、安全を重んじるとリターンは小さくなる。しかし、高いリターンを狙うとリスク（不確実性）も大きくなる。これがよく言われる「リスクとリターンの関係」です。ですから、自分のとれるリスクにあった資産の構成を組むことが必要なのです。これが資産配分です。

リスク、コスト、資産配分はコントロールできます。そしてコントロールできることをしっかりコントロールして出てくる答えがリターンなのです。つまり、リターンは自分の投資行動の結果だと言ってもいいでしょう。

FWA®からのお知らせ・セミナー予定

FIWA®マンスリー・セミナー　#201

開催形式　　On Line
開催日時　　6月19日　12:30～15:30
講演・講師
岡本 和久　「しあわせ持ちへのロードマップ⑥お金と心」
市岡 繁男氏「次はこうなる～グラフで読み解く相場の過去、現在、未来」
備考　　お申込みは開催日の三週間前より以下のサイトにて承ります
https://happymoney.stores.jp/

FIWA®マンスリー・セミナー　#202
開催形式 On Line
開催日時 7月17日　開催時間変更 13:00~15:00　（変更前 ~~12:30～15:30~~ ）
講演・講師
「大人と子供のためのハッピー・マネー®教室」
挨拶：社会にでて本当に役立つ学びとは　岡本 和久
講演：ボクらの日本一周どんぶらこ～きびだんご配って四千里　（石井 総一郎氏）
講演：庭の草を食べて生き延びた極貧からの脱出ストーリー （土井 広文氏）
講演：高校時代は「世の中大学」への入り口 （岡本 和久）
質疑応答：何でも聞いてみよう＆人生相談
備考 参加費　無料
お申込みは　info@i-owa.com （担当：田辺）まで

FIWA®マンスリー・セミナー　#203
開催形式 On Line
開催日時 8月21日　12:30～15:30
会場 On Line
講演・講師 岡本 和久　「アメリカ証券市場史（仮）」
尾藤 峰男氏「バークシャー・ハサウェイ年次株主総会に出席して」」
備考 お申込みは開催日の三週間前より以下のサイトにて承ります
https://happymoney.stores.jp/

今月号の記事をすべてダウンロードす

このページを印刷する

カテゴリー　今月のひとこと
タグ　【Vol.234】2022年06月15日発行

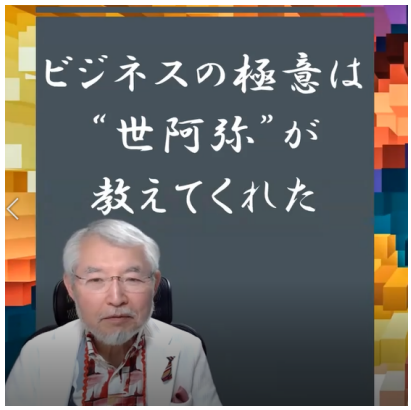
みんなのお金のアドバイザー協会
FIWA通信
インベストライフ®

2022年6月12日

FIWAマンスリー・セミナー講演 1

【Vol.234】ビジネスの極意は世阿弥が教えてくれた

講演：経済コラムニスト　大江 英樹氏
レポーター：赤堀 薫里



世阿弥の書いた風姿花伝は、純粋な芸術論ではありません。どんどん現れるライバルに対して、どうすれば自分たちがトップの立場を維持できるのか『マーケット戦略』『ビジネスのスキル』『バリューの本質』について記した戦略論です。

世阿弥は、室町時代に能を広め大成した人物として知られています。『風姿花伝』とはこの世阿弥が現した演劇論です。風姿花伝の本質は、演技論、芸術論だけではなく、世界をひとつのマーケットとして捉える。その中でどう戦い、どう勝ち抜いて生き残るかを表した『戦略論』です。これは日本の歴史上最高のビジネス書だと思っています。

風姿花伝にどんなことが書いてあるのかというと、『マーケット戦略』、『ビジネスのスキル』、『バリューの本質』です。一つ一つお話をしていきます。まずは風姿花伝に学ぶマーケット戦略。世阿弥のビジネスの根底に流れるものはすべてに関係性があることです。例えば、顧客との関係。競争相手との関係、組織との関係、自分自身との関係。つまり世阿弥は独善に陥っていない。常にマーケットをみて、顧客をみて、ライバルをみて、それに比べて、その人たちに対して自分たちはどう対応しなくてはいけないのかということを徹底的に考え抜いています。

なぜ関係性なのか。当時の芸術はある種の闘いでした。猿楽は滑稽な物まね芸ということになっていますが、これがいわゆる能のルーツです。大和猿楽四座。四つの猿楽の劇団がありますが、同じ舞台で演じあう、競い合うということをやっていました。この闘いに勝つためのマニュアル本が風姿花伝です。

当時の芸術は何でもランク付けをすることで勝ち負けを決めていました。そういう中で世阿弥はマーケット戦略を考えた。世阿弥の考えたマーケット戦略を少しお話します。一つは「珍しきが花」。花とは能にとって一番大事なものです。ずばり真実、大事なもの。もっといえば新しいもの、珍しいものです。過去に演じたものを同じようにコピペしてはいけませんよと言っています。

また、自分がかつてこうして成功したからといって、自分の成功体験に寄り掛かってはいけない。つまり、新しいことを連続してやっていかなくてはいけない。イノベーションの大切さを世阿弥は何よりも重視しています。私にとっても座右の銘です。肝に銘じています。新しいことに挑戦する。観客に飽きられないようにすることをとにかく心掛けています。新作を作り続けることが大事です。でも、新作を作り続けることはとても大変です。

そこで世阿弥はどう考えたかというと、ドラマツルギーを変えました。つまりお芝居の作り方を変えた。イノベーションをすることで量産することが可能になりました。その要素は3つあります。①二つ切の『能』、②文学作品の舞台化、③夢の活用です。二つ切の『能』とは、物語を前半と後半に分けます。前半の部分で前提になるような状況設定をする。前半でこんな設定ですよ。ということを聴衆に理解させておいて、中入りでつなぎがあって、後場にクライマックスを迎える。複式夢幻能といいます。

このようにパターンを決めておけば、ストーリーは無限につくることが可能になります。文学作品を舞台化する。伊勢物語から井筒や墨田川。平家物語から祇王、頼政。源氏物語から野宮、夕顔。有名な文学作品に旅をしてそこで夢を見させる。今でこそ映画とかテレビで実際に出かけてロケをしますよね。しかし能や演劇は舞台があって、その舞台の墨田川であったり王宮であったり、そこで演じていかなくてはならない。想像力を沸かせることをやっていかなくてはいけないわけです。

そこで出てくるのが、夢を使って表現が広がって、現在と過去を行き来する。あの世とこの世を行き来することは、今だったら画面を変えたらいくらでもできますが、当時はできませんでした。世阿弥の能は現在のメタバースでした。それまでは無骨だった猿楽に歌や踊りを入れ、かつ、過去と未来を行ったり来たりするファンタジーの要素を取り入れてエンターティメントに仕立て上げていったということです。これはすごく大事なことです。

ドラッカーがマネージメントの中で、『イノベーションとは単なる技術革新のことではない。新しい発明をすればそれがイノベーションということではなく、物事の新しい切り口や活用方法を創造することだ』と、言っています。オーストリアの経済学者のシュンペーターは、『経済の活力は革新と新結合から生まれる。常に新しい発明が必要なわけではなくて違ったものを別の角度で結びつけて行うことで新しいものが生まれてくるんだ。』といいます。つまり予想もしなかったこと、全く予想外のことが出てくる。これがまさに珍しきが花です。

講演では、マーケット志向であることの重要性として『離見の見』、『時節感当』、『秘すれば花』について、またイノベーションの大切さについて『珍しきが花』『住する所なきをまず花と知るべし』。そしてビジネススキルとして『男時、女時』の説明。最後にバリューの本質として『時分の花』と『誠の花』について大変興味深い解説をしてくださいました。

フリー・ディスカッション

岡本｜ビジネスの極意という視点で世阿弥を解説くださいましたが、逆に能楽そのものの質をどう高めていくのか、芸術性をいかに高めていくのかということについて、世阿弥的な考え方があったのでしょうか？むしろどうやって広めて成功していくのか、そちらの方が今回のお話の中心でしたので興味が湧きました。

大江｜単なる滑稽な芸ではなくて、新しい能の構造改革みたいなこと。あるいは、だんだん能楽は変遷していきますので、最初は滑稽なものまね芸みたいなものが、呪術的な能面をかざして、病気を治すみたいな、怪しい方向へ行き、そこから芸能として確立していったのが世阿弥の親子だと思います。そういう意味でいうと、常に時代の中で自分たちがどう生き残っていくのかということもさることながら、結果的にはそこから入っていったのでしょう。『二つ切の能』だとか、夢を活用することによるイノベーションだとか、そういったものは窺えるなという感じがします。
一つ一つの芸に関していうと、彼はそんなに書いていません。それは、実際の演技を指導していく中で、どう演技術を高めていくのか、みたいなことを文章にしづらい部分があったのかもしれないという感じがします。

岡本｜どちらかというと、プロモーター的なイメージが強いですね。

大江｜そうですね。競争で生き残るということを何よりも考えていたと思います。

岡本｜話はちょっとそれますが、大江さんは、もう投資の本は書かないとおっしゃっていましたが・・・。

大江｜書きますけど、あまりたくさんは書かないという意味です。

岡本｜私も書くことは全て書いたから、あとは『それを読んでくれればいいよ』という感じです。ただ一方で、いわゆる書籍というものから、YouTubeチャンネルやClubhouseとか、すごくメディアが多様化しています。読む人の態度が全体を書いた本をじっくり読んでいくというよりも、例えばYouTubeの中から知りたいことだけ検索して拾ってきて、一つ5分か10分でさらっと読んでそれでわかった気になる。それでトータルの知識体系はあまり学ばないで、断片的に知りたいことだけを拾ってくる。そういう傾向がすごく強くなってきている。それは悪い面も良い面もあると思います。そういうメディアの大きな変革期の中で、いわゆる講演活動みたいなものに対してどのようにお考えになっていますか？

大江｜合致するものであれば、私は求められたらどこへも行きます。投資について正しい理解を持ってもらいたいということであれば、私の使命の一つだと思っていますので、それはやぶさかではないし、求められるのであれば、喜んでやらせてもらおうと思っています。

投資の本も全く書かないということではありません。今までと同じようなものを書いたのであれば、多分読む人も『またこれか』と、飽きるだろうと思うので、もっと違う視点を自分なりに勉強して、それから話したり、書いたりしたいと思います。YouTubeは使い方かなと思います。取っ掛かりとしては悪いとは思いません。例えば2000円も3000円もする本を買って、面白くなかったら時間もお金ももったいないですね。

最近話題になっている本であればYouTubeで5分か10分で要約されているのがあります。それを見て面白そうであればそこから買うこともあります。YouTubeを見てこれはあまり面白くなさそうだなと思えば買わないこともあります。取っ掛かりとしてはYouTubeはそんなに悪くないと思います。中にはよくないものもありますけどね。

岡本｜玉石混交というのはどの分野もありますよね。

岩城｜若い方というのは、YouTube経由というのが本当に増えてきていますよね。資格もそうですが、学校の講座を受けるために高いお金を払ってやるよりも、YouTubeを使って勉強するというのを聴いて、そんな方法があるんだとびっくりしました。社労士の勉強をするときも、非常にYouTubeを活用しました。そういう意味では本を初めから読んで、参考書を最初から読んでというよりも、自分が分からないポイント、知りたいポイントだけを探せるという意味では、非常にいいメディアだと思います。使い方ですよね。

参加者｜大江さんは風姿花伝との出会いはいつだったのでしょうか。

大江｜実は2回あります。そもそもの出会いは、学生時代に、先輩から『これを読んだらいいぞ』と風姿花伝の文庫本をもらいました。当時は、何が面白いのか全く分からなくて、『なんやこれは？』という感じでした。会社に入って、自分が管理職になった時に本屋で、東大の成川武夫先生の『世阿弥 花の哲学』という本を立ち読みして、これは面白そうだと思い買いました。そこで風姿花伝と出会いました。87年とか88年とかそんなころです。読んでみると『なるほどな』と思うところがいっぱいありました。別に私は芸事をやっていたわけではないですが、当時から会社の仕事として講演を各地でやっていたので、そういう意味ではすごく参考になりました。今でも仕事の半分くらいは講演をしていますので、読むたびに新たな気づきがあるとか、面白いなと思っています。できれば『風姿花伝を読む』という本を書きたいと思っています。

参加者｜やっぱり学生時代では、ピンとこないかもしれないですね。

大江｜こないですね。自分も仕事をやっているわけでもないし、演劇はやっていましたので、新劇に関する本は、いろいろ読みました。欧米の演劇論はけっこう読みましたが、灯台下暗しで、能や歌舞伎に関しては興味がありませんでした。

参加者｜世の中知らないことがまだまだたくさんあるなと。今日も一つ学ばせていただきました。一つ一つ毎日知ることで、脳内でイノベーションしていくのかなと思います。本当に貴重なお話をありがとうございました。

参加者｜普通の会社員が『秘すれば花』ということをやろうと思ったら、どうしたらいいですか？結構普段の仕事をやっているなかで、何かを見せたらまた新しいことを用意しろと言われてもなかなか難しいと感じますが。ヒントがあればお願いします。

大江｜私も普通のサラリーマンを40年間近くやっていましたので、サラリーマンとして考えたらどうだというのは納得のいく話で面白いと思います。結局は意外感ですかね。自分に対して上とか周りの人はどのように思っているのか、どういう評価をしているのかということを知っておいた方がいいのかなという気がします。いい意味で、みんなの想像や期待を裏切る、ということをやるということが大事です。それは『新しい技術を身につけなくてはならない』とか、『新しいプロジェクトを立ち上げなくてはならない』という、大げさなことではありません。いつも会議の席で黙って聴いているだけなのに、この問題になると、急に口を挟んできたな。これも一つの『秘すれば花』なのかなと思います。ちょっといい意味での期待感を裏切るということはありかなと思います。でもやっぱり常にイノベーションを出し続けるということは難しいので、シュンペーターの新結合のように、ネタは全部一緒だけど、ネタの組み合わせ方をアレンジするだけで、全然違うもののように見えてくるということはあるような感じはします。

岡本｜今日は大変ありがとうございました。

このページを印刷する

カテゴリー　FIWAマンスリー・セミナー講演 1

タグ　【Vol.234】2022年06月15日発行

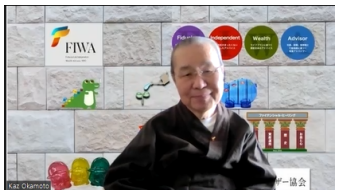
FIWA通信
インベストライフ®

2022年6月12日

FIWAマンスリー・セミナー講演 2

【Vol.234】しあわせ持ちへのロードマップ　PART4：DIY資産運用～応用編

講演　岡本 和久 CFA, FIWA
レポーター　赤堀 薫里



岡本和久

今回はDIY資産運用全体の応用編です。まず、コア・サテライト戦略について述べます。人生を通じての資産運用の中核はコア・ポートフォリオです。しかし、ある程度、投資に経験を積んでくると一歩先に進みたくなるのは当然ですし、それは良いことです。大切なことはあくまでコアは守りの戦略、サテライトは攻めの戦術であるということです。

最近知り合いの若い人が、老後のために自分も何かやらなければいけないと、毎月2万円で全世界のインデックスファンドの積立を積立NISAで始めました。2～3か月後、友達にいろいろなことを聴き、さらにS＆P500指数のファンドを2万円積立てることにしました。『わかっているのかな？』と思うことは、全世界の株式の約半分はアメリカ株。つまり2万円のうちの1万円はアメリカ株を買っているのです。さらに2万円でS＆P500を買うということは、毎月4万円の投資のうちの3万円はアメリカ株を買う。

もし仮にアメリカ株が大きく崩れるような状況になったときは、結構大きなダメージがあります。ダメ―ジがあっても続けていけばいいのですが、その辺の理解がどれくらい進んでいるのか。やはり守りの部分と攻めの部分をちゃんと理解することが必要です。サテライトだから上がりそうな投資対象なら何でも良いというのではなく、あくまで全体としてのバランスを意識することも大切です。コア・サテライト戦略は正しく理解してもらいたいものです。

コアが中心にあり、その周りにサテライトを置いていく。サテライトとして、アクティブ投資、個別銘柄投資、戦術的資産配分。もう1つは期日や金額目標を達成するための戦略を解説します。私はアクティブ投信はあまりおすすめしません。アクティブ投信は玉石混交でその見分けが難しいからです。

コアとサテライトの比率ですが、だいたいの感じで、コアは70～100%。サテライトの部分は全部合計して3割くらいかなと考えています。まずは守りをきちんと固めることです。退職後のための資産形成と、退職後の資産価値の防衛を目的とする、戦略的投資、これらはサテライトとして攻めの部分になります。攻めというのは市場全体の時価総額構成比から乖離した配分比率を持つ。これは戦術的な投資対象。戦略というのは、特定の目的を達成するために対局的な視点で組織行動を計画遂行する方策。通常は長期的であり包括的です。戦術は、具体的な作戦や任務達成のための具体的方法です。これは比較的短期。その場その場で局所的にどう対応していくのかということです。戦略を担当するのがコアで、戦術を担当するのがサテライトです。

戦術的資産配分（タクティカル・アセット・アロケーション、TAA）の部分をどう考えるのか。一般的には、株式・債券・キャッシュの3資産方式と、株式・現金の2資産方式があります。しかし、今は現金も債券の金利がほとんどゼロに等しいので、だいたい株式と現金かと考えればいいでしょう。

あとは戦術的な配分対象として地域、国のどこがいいのか。業種はどうか。大型株か小型株か。あるいは特定のテーマか。テーマをベースに投資対象を選ぶのはあまりいいと思いませんがそういう考え方もある。例えば日本株がこれから平均以上に値上がりすると思えば、コアの部分に日本株を少し上乗せする。日本株でしばらくやって、それが全世界に広がっていき、世界全体の株式ブームがきそうだという判断があった場合、日本株の部分はだんだん減らして、世界株に移していく。

もちろん世界株の中には日本株が入っています。その株式全体が割高になってきたなと思ってきたら、しばらくはサテライトはなしにしてコアだけにしておく。またアメリカの小型株が面白そうだと思ったらそれを入れてみる。株式の配分比率は変わっていきます。でもコアの部分は変えません。そのままずっとおいておく。あとはサテライト部分でいいと思うところを持つ。

一番典型的な相対的魅力度の測り方は、『益利回り－国債利回り』、いわゆるイールド・スプレッドという指標です。株式の益利回り（PERの逆数）と国債の利回りのスプレッドのトレンドを見て、株の方に魅力がより高いか、債券の方が魅力は高いかということを判断するのが普通です。同時にそれぞれの市場の局面分析があります。これは相対論ではありません。例えば、日本、アメリカの株式市場がどんな局面にあるのか。

例えば、不況の真ん中の時は普通、低金利です、景気がだんだん回復していく。そして、回復が進んでいくと金利は上昇し始める。ちょうどアメリカはこの辺に今、差し掛かっています。それがさらに回復が進むと好況の時代に入っていきます。金利は結構高止まりを続けていく。でも高い金利が続いていくと、好況もだんだん陰りをみせていく。陰りをみせてくると金利も低下を始める。景気はさらに落ち込んで不況に入る。すると金利は低下していきます。さらに金融政策で低金利が導入される。

そのようなサイクルなのですが、ただ時計のように一方方向でグルグル回るのではなく、時に3歩前進2歩後退といった具合に、行ったり来たりしながらグルグル回っていきます。そういう意味で、例えば今のアメリカ株、日本株などはどんな局面にあるのかということを理解しながら、先ほど言ったような株式、債券の相対的な魅力度を加味しながら戦術を立てていく。これが戦術的な資産配分法ということになります。

講演ではサテライトとして、個別銘柄分析についての説明、株式会社の仕組み、株価の理論値、株式期待リターンの構成についての説明。戦術的アセットアロケーションの考え方についての解説。最後に良い世の中創りのためのお金の遣い方の王道をお話しくださいました。

このページを印刷する

カテゴリー　FIWAマンスリー・セミナー講演 2

タグ　【Vol.234】2022年06月15日発行

みんなのお金のアドバイザー協会
FIWA通信
インベストライフ®

2022年6月12日

トリビア・コーナー

【Vol.234】知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家　末崎　孝幸

1945年生まれ。1968年一橋大学商学部卒業、同年日興證券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員（調査本部長）を務める。2004年に退職。
Facebook上での氏のトリビア投稿は好評を博している。

（彼女ほどの）秀才？　才媛？

中国では、隋から清代まで行われた科挙という資格試験があった。唐代には主要科目の一つに秀才科があり、秀才はその受験資格の持ち主や試験合格者をさす言葉だった。

日本で「秀才」という言葉が初めて登場したのは奈良時代のこと。最高学府ともいえる大学寮の主要科目の一つは文章道だった。その文章道の首席と次席を「秀才」と呼んでいた。その当時、大学寮に入ることができたのは男性だけ。そこから意味が広がり、頭のいい男性のことを「秀才」というようになったのである。

女性の場合は、どんなに頭が良くても「秀才」とはいわない。その代わり、女性には「才媛」という相応しい言葉がある。

郡山市に「日本一」という地名があ

郡山市湖南町にある日本一観音堂の地の字名は「日本一」と云う。 江戸期に、この地は二本松藩領で、会津藩との藩境に位置していた。

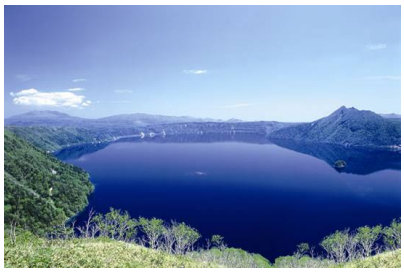
あるとき、二本松藩の殿様が、この地で採れた米を食べたところ、「この米は日本一うまい」と大変喜び、この地に「日本一」の地名を与えたと云う。

大喜利

大喜利は、本来歌舞伎の「大切り」（一日の興業の最終幕最後の場面）に由来する言葉である。江戸時代、歌舞伎の脚本が一番目（時代物）と二番目（世話物）の2部で構成されており、一番目の最後の幕のことを「大詰め」といい、二番目の最後の幕を「大切り」といった。この「大切り」から当て字を使い「大喜利」とし、寄席における最後の演目を意味するようになった。大喜利は客も喜び、演者も利を得るという意味の当て字だ。

「笑点」での大喜利が定着したため、テレビで行われる「大喜利」は、司会者の出題に対して、ひねりを効かせて答えるという言葉遊びゲームを指すことが多いが、本来こうしたものは、様々な大喜利のうち「とんち」と呼ばれるものである。

摩周湖は大きな水たまり？



日本一の透明度を誇る摩周湖、実は河川とのつながりがないことから、法律上、国土交通省が管轄する「湖」ではない。湖に浮かぶ島には樹木があるため農林水産省の管理下におかれるものの、湖には樹木が存在しないため農林水産省の管轄でもない。そのため摩周湖は国有財産として管理される不動産に大量に蓄積した水、つまり法的には「水たまり」として認識されている。

しかし、法的根拠がないだけであり、一般的には「湖」であり、世界ではバイカル湖についで2番目に透明度の高い湖として認識して何ら問題はない。

閑話休題（誤用されやすい四字熟語）

「ここからは余談ですが」という意味で「閑話休題」という言葉を使う例が小説や論文で散見される。しかし、この言葉は、脇道に入る時に使うのではなく、脇道から本筋に話題を戻す時に用いる接続詞的な言葉である。

「閑話」は「無駄な話」。「休題」とは「それまでの話題を中止すること」。すなわち、これまでの余計な話から本題に戻る時に使う言葉である。「それはさておき」という意味で使う。

学校の校庭にはなぜ桜が植えられているのか？

明治政府は教育政策の基礎を国学に求めた。そのために、江戸時代の国学者・本居宣長が詠んだ「敷島の大和心を人問はば　朝日ににほふ山桜花」という歌が広く親しまれるようになった。そして、桜は日本精神をあらわす花になったのである。

そこに目をつけたのが軍部。パッと咲いてパッと散る桜は、いさぎよく散る軍人のイメージと重ねあわされ、日本軍人の象徴となった。こうして各地の陸軍兵舎に桜が植えられたのである。

また、日清・日露戦争の勝利によって軍部が力を持つようになると、子供たちにも桜を通して軍人精神が教え込まれるようになった。こうして桜は、学校の校庭にも植えられるようになったのである。

このページを印刷する

カテゴリー　トリビア・コーナー

タグ　【Vol.234】2022年06月15日発行

FIWA通信
インベストライフ®

2022年6月12日

FIWA理事リレー投稿

【Vol.234】FIWA®代表理事リレー投稿 「気になるあの人あのことひとこと話Vol.8」

お金のことをかんたんに！おもしろく。そして投資をもっと身近に：キャサリンとナンシー （竹内 かおり氏・西岡 奈美氏）

寄稿：FIWA®協会副理事長　岩城 みずほ

みなさま、いかがお過ごしですか。ウィズコロナの日々。感染対策をしながら、少しずつ行動範囲も広がってきていますね。このまま、再び悪い方への大きな変化がないことを願いたいと思います。

さて、今回は、FIWA®認定アドバイザーである「キャサリン&ナンシー」こと竹内かおりさん（キャサリン）と西岡奈美さん（ナンシー）のご活動をご紹介します。

お二人が、「キャサリン&ナンシー」を結成したのは2012年、今年10年目になります。

主にセミナー講師として金融教育を行い、講座は年間70回超に及びます。

コロナ禍で、オンライン開催を行うようになって、活動は全国区になりました。金融教育の重要性が高まった最近は、小中学生とその親を対象にした親子講座も増えたそうです。

■「なんか面白そうでしょう？」を伝えたい

「生活者にとって、投資・資産運用は未知の世界。FP等のお金の専門家は、雲の上にいる人のようなイメージ。自分も雲の上に行きたいけど、行き方がわからない人もいる」、「そもそも見上げることさえしない人だって多い」とお二人。

確かに、不安はあるけど、とりあえずはなんとかなっているし、資産運用なんて自分とは無縁という人が多いそうです。でも、人生100年時代、老後に受け取る公的年金は生活の柱だけれど、それだけでは現役時代と同じような豊かな生活を送れないかもしれない。また、インフレに向かっている中、金利ゼロの預貯金だけでは、購買力を低下させてしまいます。よほどの資産家ではない限り、私たち誰もが、資産運用が必要な時代です。

キャサリン&ナンシーは、「私たちの役割は、雲の上に行く飛行機の乗り場所、飛行場までみなさんをお連れすることです」と言います。

「なんかよさそうでしょう？面白いことがあるよ、というのを伝えています。注目してもらうことが重要なのです」

「自分たちのセミナーに参加してもらったら、『空港に行ってみようかな』と思ってもらえることこそが大事です」

お二人は、元気いっぱいで、エネルギーを感じます。

巷では、しばしば、不安を煽って商品販売に結びつけることがありますが、そんなネガティブキャンペーンは嫌、面白いからやってみようと思ってもらえるようにしたいのだそうです。

■「お金はありがとうのしるし」というのを伝えたい

そんなお二人が、この度、『お金の考え方・使い方』（アルク）を上梓されました。

日本の10歳のお子さんとその親御さんに読んでほしい、「お金ってなに？」がわかる本です。

FIWA®理事長の岡本さんが　日本に連れてきたアメリカの豚の貯金箱ハッピー・マネー®のピギーちゃんを使って、お金の４つの使い方「ためる」「つかう」「ゆずる」「ふやす」を丁寧に解説しています。

最近は、講演でも「ふやす」の話を膨らませることも多くなったそうです。証券会社出身のお二人は、もともと株の話が大好きで、また、証券会社時代の自らの反省などもあり、正しい知識をわかりやすく伝えていきたいと語ります。

- 目標はズバリ！

最後に、お二人にこれからの目標を伺いました。

まず、キャサリンは、「2025年に開かれる大阪万博で金融教育に関するイベント（ブース）を開催したい」とのこと。夢は広がります！

そして、ナンシーは、開業当時、たくさんの人に、「FPはもうからない、講師業だけでは食べていけない」と言われたそうです。「でも、金融教育は大切な仕事、社会的意義がある仕事です。いつかマネタイズできるはず。自分たちは、そのロールモデルになりたい。金融商品を売ることで稼ぐのではなく、正しい知識を伝えて、しっかり稼げるようになりたい」と語ります。

そして、いつか、「子供向けの金融教育といえば、キャサリンとナンシーだよね」と想起される存在になりたいのだとおっしゃっていました。

今後もお二人のエネルギッシュな活動を楽しみにしています。

●プロフィール

キャサリンとナンシー （竹内 かおり氏・西岡 奈美氏）

「キャサリンとナンシーの金融教育」として活動するファイナンシャルプランナー。「お金のことをかんたんに！おもしろく。そして投資をもっと身近に。」をモットーに、子ども向けマネー教育・大人向け投資教育を行う。ともに元証券会社社員で、子育て中のリアルな母親でもある。ファイナンシャルプランナーは「お金のお医者さん」と言われるため、キャサリンはブルー、ナンシーはピンクの白衣を着て、お金の話をわかりやすく提供することを心がけている。これまでの約10年間に、金融庁をはじめ、公私立小学校・図書館・公的機関などで300回以上の講義経験がある。2022年4月に株式会社マネイクを設立。

https://www.katherineandnancy.com/

書籍『小学3・4年生向け お金の考え方・使い方』（こどもSTEAMシリーズ・アルク）

子供へのお金の教育は大切！！ とは思っていても、いざ教えるとなると大変です。

こちらの書籍は、子どもに親として話してやりたいこと、伝えたいことがコンパクトにまとめられています。分かりやすくて、取り組みやすいワークが満載なので、子どももどんどんやりたくなるようです。

10年現役で稼働し続けている著者だけあって、時代にあった内容です。ワークを通して、子どもと一緒にお金のことを考えるきっかけになります。大人でも使えるかも。親子共に楽しみながら学べる書籍です。

このページを印刷する

カテゴリー FIWA理事リレー投稿

タグ 【Vol.234】2022年06月15日発行

座談会

合計197歳が「100年に一度」を語りあう（前編）

経済評論家の三原氏と、本誌講師を務める澤上、岡本の３人の合計年齢は197歳！　証券業界の重鎮３人に、巷を賑わす「100年に一度の危機」について熱く語っていただいた。なお、この鼎談は『週刊SPA ！』の企画により、2009年２月６日に行われた。

ゲ ス ト：三原　淳雄氏
インベストライフ講師：澤上篤人、岡本和久

【三原淳雄氏プロフィール】
▶経済評論家。1937年、大分県出身（旧満州国生まれ）。59年、日興証券入社。ロサンジェルス支店長を経た後で80年に独立、㈱インパルス設立。99年、東証ペンクラブより長年証券界のために尽くした功績により、東証ペン文化賞を受賞。（社）日本商品投資販売業協会理事、日本IFA協会理事長、大阪経済大学大学院客員教授などを務める。レギュラー番組に「東京マーケットトゥデイ」（BSイレブン）などがあり、執筆活動や講演など幅広く活動。

「100年に一度」という言葉はどこかおかしい

岡本　今の経済状況は「100年に一度の危機」とよく言われていますが、三原さん、これについてどう思われますか。

三原　マスコミなんかでだいぶセンセーショナルに「100年に一度……」っていうけど、100年生きていないやつがどこから100年探してくるんだって思うよ。100年前はどういう世の中だったのかと、まだロマノフ王朝だよ。日露戦争だよ。

大恐慌からだって100年たってないんだから、軽々しく使うなって、恐ろしい言葉を。

岡本　グリーンスパンが起因していますよね。今回の株価の下げは標準偏差で見て１％の確率で起こるというので「100年に一度」と言われているんだけど、今世の中で言われているのは「100年のうちで最大の危機である」みたいですね。

三原　実際にマーケットで起きたことは100年に一度どころか、200京分の１らしいよ（１京＝１万兆）。金融工学でこういう確率を出すわけでしょ。たとえば１日１％以上株価が動く確率はどれくらいあるかとか、１日に５％以上振れるのが何日続くとか、可能性はどうとか。でも全部外れたわけだから、100年に一度じゃなくて、常識が通用しないことが起きたってことなんですよ。だから常識を変えてみればいいの。常識なんて人間が作るものだから。

僕が大学出て証券会社に就職したころは“株屋”って言われていて、株屋に入ったと聞いたら母親が寝込んだくらい。旧帝大を出て株屋に入るって相当出来が悪いってね。だけど僕らの時代はノーチョイスで、自分は貧しいから食わなきゃいけないから、証券の何たるかも知らないで就職した。それで親が落ち込んで寝込んだわけだけど（笑）。

そのときのGDPと東証の時価総額がどういう比率かというと10：１だった。GDPが10兆超え、東証の時価総額が１兆円。ということは極端に貧しい国の経済だった。要するに稼ぎのほうが多くて、ストックのほうが少ないってこと。

岡本　そういうことですね。

三原　本来、経済の教科書では金融市場と資本市場が車の両輪で表されるんだけど、資本市場がものすごく小さいから両輪にならない。間接金融前提の時代だったから、

Photo：池永一之

護送船団方式が必要だったんだよ。

つまり、銀行に競争させてつぶれたりすると国民が銀行にお金を預けなくなったりする。国が「銀行に預けても大丈夫ですよ」というには、銀行をつぶすわけにはいかない。だから銀行は貸出金利や預金金利でも競争しないわけ。それで量で勝負することになって、しばらくそれが続いてた。その典型的な例が長期信用銀行ですよ。本来なら資本市場が担うべき長期資金を長期信用銀行が債券を出して、僕らが売り子でワリコー、ワリチョーなどといって売っていた。それがわずか50年前。

岡本　ありえない状況だったわけですよね。

三原　だから100年に一度なんて、めちゃくちゃおかしい。損をしたとしても文句を言えるぐらいだからありがたいよね。あのころは損をしようにも元がなかったんだから。１兆円を１億人で割ったら、１人１万円しか株を持ってない計算になる。僕らの月給がそのころ１万円だから、株なんて持っている人はいなかったんですよ。

投資があるからこそ経済が発展する

岡本　私は以前勤めていた会社で三原さんの後輩になるんですが、入社したのは1971年で、60年代の証券不況の後でした。

三原　そのころ、うちのジュネーブにサミーっていう人がいるって話を聞いて。それが澤上さんだった。1974年かな？

澤上　そうですね。

三原　そのサミーさんがいたキャピタルリサーチ・ジュネーブが作ったのがMSCI指数。Morgan Stanley Capital InternationalのCapitalですよね。

岡本　もともとはCapital Internationalだったのを、モルガン・スタンレーが買ったんですよね。それから私が入社する前の話だけど、IOSショックというのもありましたね。

澤上　そうそう。あの後始末が大変だったんだよね。

三原　IOS（Investors Overseas Services）ショックで世界中の株が下がりましたね。

澤上　IOSは超特大のグローバル運用ファンドで、当時まだよちよち歩きだった日本企業も１千万株単位で組み入れていたから、後始末が結構きつかったですね。

三原　僕はマーケットを見るとき、いつも中島みゆきの歌を口ずさみながら見てる。「喜び悲しみ繰り返し」って言ってね。

一同　（笑）

三原　回るんです。「今日は倒れた旅人たちも」が「今日は倒れた投資家たちも」。

一同　（笑）

三原　生まれ変わって歩き出すんですよ。今、必要なのはそういうマインドじゃない？　僕ばかり話しちゃってごめんね。老い先短いから、今のうちに言っておかないと（笑）。

澤上　これからも、まだまだ長くやってもらわないと困るんですけどね。この対談、１冊の本にしたらいいかもね。

三原　すごい単行本になるんじゃない。

岡本　でも、すぐ発禁になるんじゃない（笑）

三原　僕フリーじゃない。今ぐらい投資の原点に立って考えられる時期って、100年に一度とは言わないけど、僕の50年の経験から言って初めてですよ。

どういうことかというと、日本人はマーケットも株式会社も天から降ってきたものだって思っているところがあるでしょ。株式が公開されて株価というのを一般の人は見て知っているけれど、そもそも社会に富を生み出すのは誰かというのを考えたことがないよね。一般の投資家は安く買って高く売るのが株だと思っているけど、その後ろには企業がある。企業がなかったら社会に富は生まれない。自作農ばかりで富が生まれますかって。自分で作った野菜を売って儲けが出て税を納めるから、少しは生まれるけど。

誰かが起業して、誰かがお金を出して、人を雇って給料払って、所得が生まれて税収が生まれて、その人たちが家を買って、という具合にして町が発展してきた。アメリカ人なら子どものときから歴史を習えばわかるわけ。

移民ばかりの国がなぜあれだけ急速に経済大国になったかというと、ヨーロッパからお金を引っ張ってくるというシステムを考えたからで、それが投資銀行のルーツなんです。投資銀行があったから、JPモルガンができた、カーネギーが鉄鋼王になれた。カーネギーが生まれただけでどれだけ効用が生まれたかというと、ピッツバーグという町ができるくらいなんです。

もともと投資があるから、人は

岡本　和久

豊かになる、税収も増える、国は豊かになる、こういう循環が投資の原点のはずなんですよ。それで投資家は何年で元が取れるかを考える。

岡本　投資家が、たとえば１万円で買った株を２万円で売ったとしても、その儲けは企業にはいかない。だから株主というのを総体としてみれば、企業と株主のつながりというのは結局、配当で回収するしかないんですよ。

三原　ところがこれまで日本は高度成長だから、成長ばかり見ていて配当なんか無視していた。配当払うより、内部留保して次の成長に投資するほうが株主・企業双方によかったという時代があった。税金払ってまで配当くれなくてもいいですよ、という時代が。

　マイクロソフトも成長過程では無配ですよ。株主も企業の価値が上がるっていうので喜んだ。だけど成熟してくるとそうはいかない。

投資とトレーディングの違い

岡本　みんなの目が株価にいきすぎましたよね。株価の変動に。それにうまくどうやって乗るかというのが投資だと思った。それが大きな間違いなんですよ。

三原　それってトレーディングでしょ。トレーディングやるなって言わないけど、株で儲けた人はいかがわしいことやってるみたいに思われないようにしてほしいね。

　原点に立って考えれば、企業は社会に富を生み出すエンジンで、そこにお金を出す株主というのは燃料供給している人たちですよ。燃料がなかったらエンジン回らないですからね。それを担っているのが株主、その人たちが投資家なんです。だから株をやるって、一言でインベストメントとトレーディングとスペキュレーションの３通りを一緒にしないでほしい。澤上さんは明らかに投資をやっているけれど、今、ネットのブログなんか見ているとみんなトレーディングね。

澤上　そうですね。

三原　そういうのは巾着きりみたいなトレーダーで、企業にとってなんの関係もないし、むしろ邪魔なのよ。企業が努力して株価上げたって、すぐにいなくなるじゃない。自分で勝手にやってくれたらいいんだけど、損するとわぁわぁ騒ぎ立てるから金融商品取引法みたいのができてくる。

一同　（笑）

三原　さわかみ投信にくるような正しい投資家が育たないといけない。

　なぜ日本株が世界で最も長けたかというと、日本人が買ってないからです（笑）。そのくせ「主婦の私が何千万円儲けました」みたいな本ばかり読んだりして、日本の株を買っていない。

岡本　外国人が動かすマーケットって言われていますよね。だいたい外国人が買うから日本人が買うっていうのは変な話ですよね。

澤上　いまだに植民地市場のまま。

三原　今、株価は時差が決めているようなもんですよ（笑）。日本人のマインドなんて入っていない。ニューヨークが下げたから、とりあえず朝下げますと。落ち着いてちょっと戻してきたら、上海が下げたからまた下げますと。もう、時差、時差投資ですよ。

　日本の投資家はどこへ行ったんでしょう。世界のマーケットを引っ張る気概はないのか。お金がないならしょうがないですけどね。でも今、時価総額の３倍くらい預貯金を持ってるでしょ。700兆ぐらいあるんじゃない。

澤上　778兆円、個人の預貯金だけで。

三原　そのうち２割でも株式市場に移してみてよ。あっという間に５～600兆円になるよ。

澤上　そうなんですよね。みんな幸せになれるのに。

三原　みんな幸せになる。澤上さんなんかはもっと幸せになる。

一同　（笑）

三原　以前、アメリカの有名なファンドマネジャーのピーター・リンチにインタビューしたことがありますが、彼を訪ねていく途中タクシーの運転手に「どこから来た？　何しに来た？」と聞かれて、「日本から来て、これからピーター・リンチに会う」って言ったら、「グレイト！」と言われて、「何がグレイトなんだ？」と聞いたら、「彼もリッチになったけど、多く

のアメリカ人をリッチにした」と。

そのころ彼はジュニアアナリストだったんだけど、彼の上位ファンドマネジャーに任されたのがマゼランファンド。そのときの規模は3～40億で、それが13～14年後の引退するときには700倍になって2兆を超える巨大なファンドになった。

日本では巨大なファンドに育つ前に、2割から3割上がるとみんな解約していなくなるから巨大なファンドが育たない。アメリカ人はピーター・リンチのファンドがすごいとなると、高くなってもどんどん買うんですよ。ですから資産総額は700倍になって、この間基準価格は25倍になってる。

子どもが生まれたときに1000ドル買っていれば、大学に行くころには2万5000ドルになった。事実、そう言われましたよ。ニューヨークで彼をインタビューした後、ロビーで人を待っていたアメリカ人からね。「あの人のおかげで私の子どもは大学に行けた。あなたがインタビューに行く前に会えたら、彼にお礼を伝えてほしかった」と。

僕は日本でもそういう話を聞きたいね。

岡本　日本ではそういう話を聞きませんよね。何となく株をやってるか、儲けようとか、デイトレーディングとか。

三原　そういう投資もないしね。なぜかっていうと、ほとんどがトレーダーでしょ。せっかくいい投信作っても、値が上がるとみんな売ってしまっていなくなる。

残存元本が減ったら運用できないから、証券会社とか投信会社は、まずは投資家本人を育てるべきだよね。

澤上　自分のためにもなるし。

三原　そうですよ。投資家も勉強すべきですよ。投資家が自分で考えるのをやめて、僕らが講演でさんざん話した後、「今、買いですか？　売りですか？　何を買ったらいいですか？」と聞いてくる。あなたが言う"上がる株、良い株"っていうのは、今日が底値でとんとんと上がっていて10日後には5割ぐらい上がる株のことで、そんなことがわかれば講演に来てるわけないでしょって言いたいよね(笑)。

一同　(笑)

三原　僕は生まれた国を間違えちゃったね。バフェットと僕は年がそんなに違わないのに、なぜ僕はバフェットになれないかというと、生まれた国を間違えた。

澤上　アメリカに生まれていれば人生違っていましたね。

三原　日本って金持ちの足を引っ張る国でしょ。金持ちが金持ちらしく社会にきっちり還元しない国でしょ。でもアメリカは違う。バフェットが言ってましたよ。なんていい時期に、いい国に、しかも白人の子として生まれたんだと。だから、感謝する気持ちのほうが大事だって。幸いにも、発展途上のアメリカで、マーケットがあって、マーケットをうまく利用できた。マーケットが助けてくれて、自分は6兆円もの富を築いた。だからこれを社会に還元するんだと。

僕は彼から5年遅れて戦前の満州で生まれて、ソ連に侵略されて死にそうになって日本に帰ってきた。学校では「金持ちはよくない、企業はよくない」と教育を受けた。大学では経済学部だからというこ

澤上　篤人

ともあって証券会社に入った。そこで、安く買って高く売るのが株式投資だと錯覚したままアメリカに行って、初めて投資に目覚めたときはもう40歳。こんな商売入ったから、今度は身奇麗にしてないと日本のマスコミから何を書かれるかわからない。三原は株式投資で儲けているらしい。インサイダー情報でも利用しているんじゃないかと書かれたら、僕おしまいになる。僕、口が悪いから本当に身奇麗にしないといけない。これで講演に行ってる不思議さ。アメリカなら僕や岡本さんとか貧乏人が講演に来ると、帰れって言われますよ（笑)。儲けた人の話を聞きたいとね。

岡本　体験談をね。

三原　だからバフェットが講演するっていったらタダのはずないよ。おそらく大ディナー大会で入場券付15万円、それでもたくさん人が来るだろうね。ちなみにバフェットは年に1回、自分とお昼ご飯を食べる権利をオークションにかけてるけど、去年いくらだったか知ってる？　一昨年が6千万、去年が2億2千万。

一同　えーっ。

三原　落としたのが二人とも中国系の人。一昨年、6千万で落としたのが中国系アメリカ人で、身ひとつでアメリカに渡ってきて成功した人で自分も社会に還元したいって言っている。去年は香港の中国人の投資家。

われわれもバフェットみたいになりたいね。それで日本でそういう話を聞きたい。お金持ちになりたい人には、僕らでよければいくらでも応援しますけど、その使い道を考えさせてほしいね。たとえばオーケストラを応援するとか、絵描きを応援するとかね。

岡本　それで文化が育っていくことがありますからね。

三原　去年派遣村に民主党のお偉いさんが来て、こんなふうになったのは麻生内閣のせいだって言ってたけど、彼は大金持ちなんだから3億くらい出したらいいのにね。

一同　（笑）

三原　納得がいかないよね。国が何とかするっていったって、僕たちの税金でやってるわけでしょ。派遣村の500人ぐらい助けてあげたっていいのに。昔はいたんだよ、恵まれない困った人を助ける富豪や投資家が。

岡本　だいたい藩主なんてもともとそういう存在だったんですからね。藩のなかの恵まれない子とか、優秀な子がいたら常にお金を出していましたよね。陰徳ってありましたよね。今はそういう人がいなくなりましたね。

澤上　それは、お金を持っている人々の役割なんだよね。持てる人たちが、持てる能力やお金を世の中へどんどん分配していく。それで社会が成り立っていくんです。ところが、やたらめったら平等でしょ。何もかもが平等でなければでゴリ押ししてくる。

投資の原点は世の中を良くしようという気持ち

三原　昔、マーケットで勝った人というのは大地主になって極悪人みたいに言われてるけど、大方の人は篤志家の人なんです。食うに困って土地を買ってくれって言われて「ああそうなの」と言って買ってあげて大地主になった人が多かった。たいていは慈悲の心をもっていたわけよ。

株式投資も一緒で、株価がわぁーっと上がってるとき、みんなそんなに株を買いたいの？　売る人が少ないから上がるんだろう、じゃあ売ってあげようと。下がったときは、そんなに下がったらみんな困るだろうということで、自分に少し余裕があるから買ってあげようと、こういうのがだいたい成功する人のスタンスだと思うんですよ。

岡本　そうですね。

澤上　そういったときに儲けようじゃなくて、世の中が困っているんだったらちょっとお手伝いさせてもらおうという気持ちね。みんな世の中が喜んでくれるのなら、と。それが結局はリターンになって戻ってくることなんだけど。

稼ぐ意図なんてどこにもない。トレーディングで儲ける意図なんてどこにもないから、戻ってくるんだよね。

三原　それが投資の原点ですよ。会社を作ろうとする人にお金を出す人は、そういう人ですよ。値上がりなんてもとから期待してませんよ。最初の年は無配でもいいけれど、せめて15年くらいたったら回収できるとかね。それくらいのビジネスプランは立ててほしいよね。

株主になるということはオーナーになることです。大方、日本では株をやるというのは誤解されてトレーディングだと思われていますよね。それならIRとか、企業に文句言っちゃいけないよね。企業は一生懸命努力しているんだから、企業価値を上げようとね。でもトレーダーなんて企業の価値が上がって、株価が上がったらいなくなっちゃうでしょ。こういうのは根本から認識を、マーケットとか株式とか改めて勉強し直す今がいい機会なんじゃないですか。

岡本　そういう視点を変えると、今のマーケットが全然違ったものに見えてきますよ。いつまでもこういう状態が続いているわけじゃないし。

澤上　絶対そうですよね。

小さな雇用を守るのか大きな雇用を存続するのか

三原　今、悲観的な報道されてるなかに“派遣切り”がありますが、派遣切りというのは嫌いだけど、本来の意味は派遣の契約が切れたってことなんですよね。途中で無理やり切ってるみたいだけど、実のところ契約切れなんですよね。契約更改しなかったら悪者みたいにいわれるのは、おかしいよね。

契約が切れてクビになる人は気の毒だと思うんだけど、その人たちをそのまま抱え込んだまま会社がつぶれたほうがいいんですか、

という議論が一方でされるべきだよね。

澤上　そういう話は全然しないね。

三原　２万人の方にお辞めいただいて20万人の人が助かるんだったら、社会的にはこっちのほうが良いじゃない。20万人が失職したら、税収も落ちるし生活保護も増える。

澤上　もっと大変になりますよ。

三原　だから今、むしろそうやって企業がスリムになってくれていることはありがたいことなんですよ。利益が落ちて費用削っているから、利益が出やすくなる。すると株が上がってくる。心ないマスコミは何書くかっていうと、「人員の犠牲のうえに利益を出している」ってね（笑）。利益を出してくれなきゃ、世の中の役に立たないじゃない。

岡本　内部留保がたくさん貯まっているんだから、それ使えみたいな滅茶苦茶な議論ですよね。株主のものなんですから。

三原　しかも内部留保って、全部キャッシュがあるわけじゃないし。

澤上　10年前にも同じような経験してるよね。バブルが崩壊したのが90年。それから日本経済は急激に下降して、地価も株価も下がって不良債権問題大変だって騒いでた。実はあのとき、90年くらいから95年の４月までは円はドルに対して２倍になり、超円高だった。すると輸出企業はダブルパンチをくって、下請けさんを切ったりしてマスコミに袋叩きにあいましたね。

　でも、バブル崩壊による資産デフレや超円高を切り抜けたあと、輸出企業は一つとしてつぶれてないよね。つまり小さな雇用は切ったけど、大きな雇用は守った。ところが日本の国内の金融業なんかみんなバタバタとつぶれた。だけど、国から守られているというのもあってマスコミに叩かれない。逆につぶれたときはマスコミに同情されたりして、おかしいよね。

　経営者が命がけで雇用を守っているのに、それに対して売国奴みたいに書かれたりしたんだよね。大きな雇用に対して無責任もいいとこですよ。

岡本　オバマが「チェンジ」と言ってるけど、日本だと「変化」ですね。去年を漢字１字で表すと「変」だったですよね。変っていうのは、「あいつは変なヤツだ」とか、「変なことするなよ」みたいに悪い意味にとられるけど、チェンジっていうのはある状態が別の状態に移るということ。世の中って常に変化しているから、やっぱり変わっていかなきゃいけない。

　為替が高くなれば、企業だって変わらなきゃいけないんですよ。それが一段落したら、また別の変化が起こってくるだろうし、とにかく固定してちゃいけない。今は思考停止になっているかもしれませんね。

三原　また昔の世の中にふっと戻るんじゃないかと思うことがあるけど、戻りっこないよね。僕はたった50年しか働いてないけど、50年前と今と何が一番大きく変わったかというと、豊かになった。貧しいのは心。依然としてね。

　変な国に生まれて損したのが僕。バフェットになれなくても、アメリカならもう少しのびのびと生きてますよ。

岡本　結構のびのびと生きてるように見えますけど（笑）。

三原　そのために払っている犠牲が大きいよ。テレビ局から追い出されたり、金に絡まないでやってるから金儲けできないし。一番マーケットをわかっているグループに入っているのに、だけど僕が株式投資でお金儲けたりすると、村上ファンドの村上さんのような目にあわされるからね。

岡本　三原さんが証券会社で注文出そうとすると、受けてくれないそうですね。

三原　70歳以上だから。家人同伴じゃないと。

澤上　ようやく晴れて自由に投資できる身になったのにね（笑）。

岡本　金商法のせいですね。

リスクの本当の意味

三原　そういった法律で縛るわけですよ。この国はリスクを悪だと思っていますからね。日本語を正確に使ってほしいですよ。リスクの意味を正確に理解してないでしょ。危険と誤解している。本当の危険はdangerのはず。高いビルの屋上のがけっぷちに立っているというのはdanger。何のリターンもない。

　リスクというのはリターンとセットになっている。だから、たとえればプールで泳げばおぼれるリスクあるけど、泳ぐ楽しみもあるよねっていうのがリスクなの。みんなが勝手にリスク＝危険と誤解しているから金商法みたいのができるわけ。

岡本　責任ってもともとそういうものでしょ。バフェットだって日本人だったら注文出せませんよ

ね。もう79歳ですからね。

三原　彼はすごいよね。バイ・アメリカっていって私財は全部アメリカ株につぎ込んだからね。

岡本　それは結局、アメリカ＝政府じゃなくて、民間企業なんだという発想があるんですよ。

三原　アメリカの民間の活力、そういうのを今バイ・ジャパンでやれって言ってるんですけどね。今の日本で余裕があってお金を持っている人は、株や投信持ってなくてよかったねと思っているわけでしょ。

澤上　やらないでよかったねとかね。

三原　こんなときに出てきて株を買って儲かると、何をやってるんだとか、いかがわしいことして、と言われる。これは、僕が就職したころの間接金融の考え方から変わってない。

岡本　私が証券会社に就職したのは71年で、あのときに社長が新入社員のあいさつのときに、君たちはいい会社に入った。これからは直接金融の時代である。今までは間接金融だったけど、これからは直接金融の時代であると。これから証券会社が果たす役割は大きいんだと言われたけど、今と同じこと言ってますよね。それぐらい間接金融が根強かった。

三原　信仰に近いよね。

岡本　そうですね。それなりに役割を果たしてきたけれど、バブルが崩壊して銀行など間に入っている金融機関のリスクテイク能力がどんどん下がってきた。

　リスクテイクというのは、銀行に預けているお金を銀行がどこかに貸し、そこがつぶれてしまっても預金者のおカネは大丈夫なわけですよ。銀行がそのリスクをとってくれる。だけど貸している先がバタバタ倒産しちゃったら銀行も危なくなる。そういう意味でのリスクテイク能力がなくなってきましたよね。今、ようやく変わってきていると思いますけどね。

三原　ところがアメリカの大手投資銀行がさんざんなことをやってきたから投資銀行が悪みたいにいわれてるけど、投資銀行って絶対に必要なんですよ。投資銀行は自分でリスクをとっているわけ。企業が増資をするときに幹事会社になるってことは、お客さんが買ってくれなかったら自分が全部引き受けるわけだから、そうやってアメリカの経済が活性化してきた。だから日本とはちょっと違う。

岡本　投資銀行のリスク管理能力が甘くなってきたのだと思うんですよ。長い間、楽なマーケットのなかで。

澤上　だから今、反省しているだけの話ね。反省して甘くなったのをシビアにやればいいだけの話。

国家の過剰な介入がマーケットの自由を奪う

岡本　今、世界的に見て一番不安を感じるのは、国家の過剰な介入ですね。資本主義そのものへの。もう一つは、規制の過剰な強化でしょうね。あとは保護主義です。やっぱりそういうのが、この混乱のなかでわぁーっと出てきて、本来のあるべき活動を阻害しだすと、あまりいいことがないなと思いますね。

三原　結局レーニンが正しかったことになるからね。

一同　（笑）

澤上　アメリカって自由とか市場をすごく大事にするでしょ。だから規制とかやってもね、そのうち落ち着かなくなるんですよ。逆に問題があるならあるで、それを一掃してしまおうという考え方が一番効くのがこの国なんですよ。

　アメリカ見てたらわかるけど、この状況から抜け出すのはそんなに遠くないでしょう。意外に早く活力出てきますよ。だって民間が自分たちでやってるんだもの。民間が集まってマーケットってできるんだから、行きすぎた場合はみんなで反省してるわけ。米国での市場の浄化作用ってものすごいですね。

三原　本当の市場は浄化作用を持ってるんですよ。ただし市場は合理的に動かない。世の中も、市場も合理的に動いたら逆におもしろくもなくおかしくもない。澤上さんがパナソニックを1000円だと思って、世の中全員が1000円だと思ったら……。

澤上　買えない。

三原　だから両側から見るという視点が必要なんです。自分は1000円で安いと思って、誰かが売ってくれるから買えるんだけど、1000円で高いと思って売ってくるかもしれない。それともなりふりかまわずキャッシュが欲しいから売ってくるだろうかとか、こういう合理的な判断ができれば、１日で1000円もドーンと下がったときに、ありがとうって言って、そんなにお困りなんだったら、キャッシュが欲しいんだったら、幸い手持ちキャッシュあるから買いましょうと。

澤上　これがマーケットなんです

よ。みんな、参加者が自分で判断している。

岡本　みんな前提が違うよね。企業の評価も人によって全然違うし、経済環境の前提も違うし。ある人は円高だと思っているし、ある人は円安だと思っているし。半年先を見ている人や３日先を見ている人もいれば、30年先を見ている人もいる。

いろんな人がパナソニックという株を見て、ある人は1000円、ある人は3000円、ある人は5000円だと思うというバラつきがあって、そこで注文が交錯してコンセンサスとして今の値段が決まるわけでしょ。

三原　だから長期的に見ると、合理的な動きになる。これはあるんです。衰退する企業でも、良くなる企業でもある。だから、おもしろい。これがみんなに見えていたら、おもしろくもおかしくもないですよ。

岡本　大きなトレンドってあるんですよ。そのトレンドの周りにサイクルみたいな部分があって、上がったり下がったりしてるんですよね。

澤上　ありとあらゆる価値観とか時間軸とかが入り込んで、時々刻々と価格というものが形成される。その時点その時点の力関係がどうとかが価格として表示される。そこの情報が大事なんです。それを市場関係者がコントロールしたり、役人が規制したりすると価格が伸長しないわけ。経済の活力、その価格は色づいている。いろんなものが入っている。その出てくる価格に対してどういうふうに考えるかですよ。

岡本　やっぱり自由じゃないとダメですよ。

三原　マーケットは合理的じゃないからおもしろいんですよ。でも、日本は全部法律で規制しようとするからね。もう時代に沿わない法律はどんどん廃止して、時代に沿ったものを導入してくれればいいんだけど、日本は禁ずる法律ばかりだもんね。アメリカもドイツもしょっちゅう変えてるでしょ。日本だけよ、１回作ったら変えられませんって。

岡本　アメリカなど、修正すると過去のそれに反する条項がすべて無効になりますからね。

澤上　日本では古いものを引きずってるわけですよ。そういうことは覚えていて、都合のよいときに引っ張り出してくるんですよね。今も適用できるとか。

岡本　ここをこう読み替えれば何とかできそうだとか､多いですよね。

三原　前例を見て引っ張ってくるからね。だから今、たとえば澤上さんにお願いしようと思ってるんだけど、“じいさん・ばあさん・孫ファンド”というのをやってくれないかな。

じいさん、ばあさんが最初から孫の名前で買う。たとえば上限は１人100万まで。つまり贈与税の範囲。３年間ぐらいは積み増しを認めよう、その代わり解約は孫が成人になるまでダメ。孫が生まれて最長の人で20年。10歳以下の孫じゃないと受け付けない。

じいさん、ばあさんにとっては大したお金ではないんですよ、孫のかわいさからするとね。それが10年20年たったらどれだけ化けるかというのを１回検証するには、今がいい下げだと思っています。利回りだけである程度保証できる。３％でくくっても６割回収するんだから、再投資していったらもっとすごいことになるかもしれない。それで孫が、たとえばケンブリッジへ留学したいといっても100万円が留学費用くらいになる可能性がある。

澤上　実はね、じいさん、ばあさんが孫のためにファンドを買ってやるのは問題ない。ところがじいさん、ばあさんが直接は買ってやれない。親の同意を得なければならない。直接の責任者・親権者が両親だから、両親がフンって言ってるとダメで、これがネックなんですよ。

三原　ものすごく意義があるファンドだし、日本中の投資に対する考え方を変えるでしょう。時間はかかるけど、最低10年ぐらいね。長期投資でうまく組んでいくと、すごいことになる。

今度それを目指したファンドが渋澤さんのところでできましたよね。30年先の目線で30銘柄、成功してほしいと思います。

澤上　今みんな立ち上がってがんばっていますよね。

三原　孫に、私が大学進学できたのはおじいちゃん、おばあちゃんのおかげって思われたらいいよね。死んでから墓に孫が花を持ってきてくれるなんていいよね。

澤上　ものすごいニーズがありますよ。

三原　絶対成功すると思いますけどね。するとマインドが変わりますよ。もうそれぐらい長期で変えていかないといけないね。

（次号に続く）

みんなのお金のアドバイザー協会
FIWA通信
インベストライフ®

2022年6月12日

動画紹介

【Vol.234】FIWA動画紹介

岡本 和久 CFA, FIWA

高校生と語る　EYEAMWatchingキャンペーン　戦争は・・・人を殺す行為

（左から）山口 亜弥ちゃん、柴田 眞子ちゃん、岡本 和久

今月は2022年5月18日から毎週水曜日、四回にわたって公開された高校三年生の柴田眞子さん、山口亜弥さんと私（岡本）の対談をお送りします。若い新鮮な目に戦争がどう映るか、私も感動しながら話し合えました。
EYEAMWatchingキャンペーンのコンセプト動画は以下でご覧いただけます。

EYEAmWatching キャンペーン　コンセプトビデ...

日本語版

EYEAmWatching Campaign Official concept video

English Version

第一回　War!War!War!　（16’41"）

0’00” はじめに
1’32"　自己紹介
2’54"　キャンペーン動画紹介
3’05"　なぜこの運動を始めたのか
9’23"　ウクライナ問題で何を思うか
15’09"　戦争は・・・人を殺す行為

高校生による　戦争は・・・人を殺す行為　第一...

第二回　戦争が生活に忍び込んできている（24’30"）

0’00” はじめに
1’24"　私（岡本）にとっての戦争
6’20"　学校の授業で戦争の話は？
10’10"　キャンペーン動画紹介

10’17"　EYEAMWatchingという言葉に至った経緯
13’35"　活動に対する周りの反応
17’02"　一番難しいことは？
18’30"　二人にとってPeacemakerとは？

高校生による　戦争は・・・人を殺す行為　第二...

第三回　戦争のある日常に慣れていませんか　（22’55"）

0’00” はじめに
1’21"　国家について考えよう
9’21"　生活者が情報とお金のネットワークでつながる
13’09"　海外からの反応
14’55"　18歳からの選挙権

高校生による　戦争は・・・人を殺す行為　第三...

第四回　絶対に戦争に慣れてはいけない（15’50"）

0’00” はじめに
1’15"　戦争への抑止力は情報とお金
3’02” 今後の戦略は？
7’35"　明治維新はなぜ成功したか
11’35"　視聴者のみなさんへのメッセージ

このページを印刷する

カテゴリー　動画紹介

タグ　【Vol.234】2022年06月15日発行

＜モデルポートフォリオ：2022年5月末の運用状況＞

単位： %

		トータルリターン				リスク	1万円ずつ積み立てた場合の投資額に対する騰落率			
		1ヵ月	1年	5年（年率）	10年（年率）	10年（年率）	1年 12万円	5年 60万円	10年 120万円	2000年1月～269万円
4資産型	積極型	−0. 05	6. 01	8. 79	13. 05	14. 40	1. 70	28. 64	65. 58	143. 27
	成長型	−0. 22	3. 54	6. 18	9. 55	9. 74	0. 80	18. 74	42. 23	99. 01
	安定型	−0. 40	1. 04	3. 45	5. 98	5. 69	−0. 13	9. 20	21. 68	59. 72
2資産型	積極型	−0. 57	8. 11	10. 95	14. 16	15. 50	2. 80	37. 77	79. 67	184. 32
	成長型	−0. 65	5. 09	7. 89	10. 66	11. 12	1. 64	25. 28	52. 07	126. 17
	安定型	−0. 72	2. 04	4. 69	7. 10	7. 45	0. 43	13. 45	28. 09	76. 16

＊ 投資にかかるコストは控除していない。積み立ては、税引き前分配金再投資。ポートフォリオは毎月リバランスをしたものとする。
積み立ては計算月数分を運用したものとする。例えば1年の場合は2021年5月末に1万円投資資金を 積み立て始め、2022年4月末の投資資金までとする（2022年5月末積み立て分は運用期間がないため含めていない）。

出所：イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがMorningstar Directにより作成。Morningstar Directについてのお問い合わせは、イボットソン・アソシエイツ・ジャパンのお問い合わせメール（https://www.ibbotson.co.jp/contact-us/）まで。

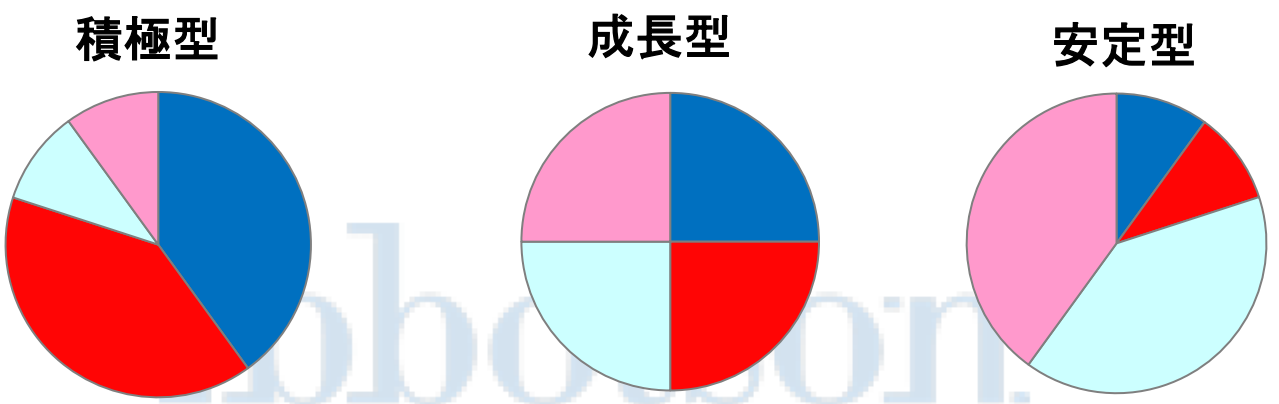
ポートフォリオの資産配分比率（外貨建て資産は円換算ベース）

		国内株式：TOPIX	外国株式：MSCI KOKUSAI	国内債券：NOMURA-BPI（総合）	外国債券：FTSE WGBI（除く日本）
4資産型	積極型	40%	40%	10%	10%
	成長型	25%	25%	25%	25%
	安定型	10%	10%	40%	40%
		世界株式：MSCI ACWI（含む日本）		世界債券：FTSE WGBI（含む日本）	
2資産型	積極型	80%		20%	
	成長型	50%		50%	
	安定型	20%		80%	

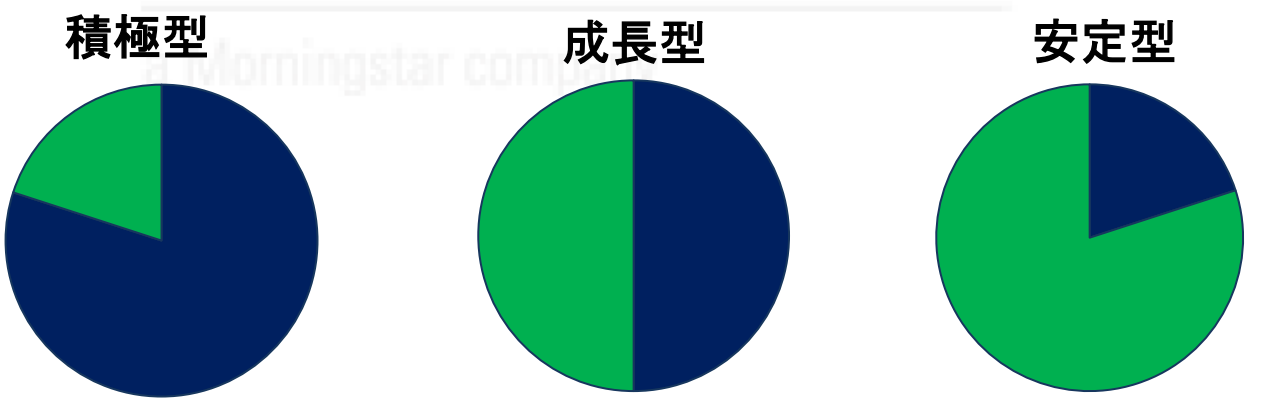
ポートフォリオは「インベストライフ」が参考のために考案した資産配分に基づき、イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがデータを算出しています。
特定の資産配分による投資の推奨を行うものではありません。

「長期投資仲間」通信『インベストライフ』の
その他の記事はこちらからご覧ください。
http://www.investlife.jp/

4資産型
- 国内株式：TOPIX
- 外国株式：MSCI KOKUSAI
- 国内債券：NOMURA-BPI（総合）
- 外国債券：FTSE WGBI（除く日本）



2資産型
- 世界株式：MSCI ACWI（含む日本）
- 世界債券：FTSE WGBI（含む日本）



Copyright ©2022 Ibbotson Associates Japan, Inc.

＜直販系ファンド：2022年5月末の運用状況＞

当資料は「インベストライフ」のために、イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがデータを算出、作成しています。
特定の投資信託による投資の推奨を行うものではありません。

運用会社名	ファンド名	トータルリターン				リスク	1万円ずつ積み立てた場合の投資額に対する騰落率				1万円ずつ積み立てた場合の月末資産額				2022年5月末		2022年2月末	2022年5月中
		1カ月	1年	5年（年率）	10年（年率）	10年（年率）	1年 12万円	5年 60万円	10年 120万円	2000年1月～269万円	1年 12万円	5年 60万円	10年 120万円	2000年1月～269万円	純資産（億円）	基準価額（円）	（前回掲載時）基準価額（円）	推計資金純流入額（億円）
さわかみ投信	さわかみファンド	2. 32	−1. 16	5. 66	11. 74	17. 87	−2. 30	15. 00	47. 11	201. 49	11. 72	69. 00	176. 53	548. 72	3, 342. 4	30, 038	29, 558	6. 41
セゾン投信	セゾン・バンガード・グローバルバランスファンド	−0. 27	5. 64	7. 32	10. 04	11. 22	2. 11	24. 21	48. 07	—	12. 25	74. 53	177. 68	—	3, 130. 0	19, 344	18, 536	37. 58
セゾン投信	セゾン資産形成の達人ファンド	−0. 63	−0. 27	10. 04	15. 95	19. 02	−2. 88	30. 75	85. 37	—	11. 65	78. 45	222. 44	—	1, 902. 0	30, 125	29, 227	40. 28
レオス・キャピタルワークス	ひふみ投信	0. 54	−9. 84	5. 65	16. 05	18. 07	−8. 52	7. 90	69. 05	—	10. 98	64. 74	202. 86	—	1, 387. 5	54, 837	54, 437	8. 45
鎌倉投信	結い 2101	0. 65	−6. 96	2. 55	6. 88	9. 75	−4. 92	1. 60	20. 22	—	11. 41	60. 96	144. 26	—	464. 1	19, 602	19, 662	2. 07
レオス・キャピタルワークス	ひふみワールド	−0. 29	−1. 91	—	—	—	−4. 95	—	—	—	11. 41	—	—	—	394. 2	15, 269	15, 201	5. 47
コモンズ投信	コモンズ30ファンド	−0. 44	0. 43	8. 16	13. 16	17. 48	−2. 22	24. 71	66. 57	—	11. 73	74. 83	199. 89	—	341. 3	37, 042	36, 075	7. 43
ありがとう投信	ありがとうファンド	−0. 45	−5. 37	7. 66	12. 34	17. 43	−6. 91	25. 01	60. 38	—	11. 17	75. 01	192. 45	—	168. 6	25, 190	24, 916	0. 05
ユニオン投信	ユニオンファンド	0. 81	−4. 07	4. 51	9. 71	16. 27	−2. 44	16. 45	39. 36	—	11. 71	69. 87	167. 24	—	98. 9	29, 481	28, 874	0. 70
クローバー・アセットマネジメント	コドモファンド	−1. 28	−8. 03	5. 61	—	—	−7. 35	9. 91	—	—	11. 12	65. 95	—	—	93. 5	20, 498	20, 236	0. 49
コモンズ投信	ザ・2020ビジョン	1. 58	−9. 72	10. 83	—	—	−9. 43	25. 56	—	—	10. 87	75. 34	—	—	69. 3	21, 913	21, 516	0. 86
レオス・キャピタルワークス	ひふみらいと	−0. 67	−5. 34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	30. 0	9, 495	9, 789	0. 32
セゾン投信	セゾン共創日本ファンド	0. 63	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	20. 2	10, 078	9, 912	1. 18
クローバー・アセットマネジメント	浪花おふくろファンド	−1. 11	−9. 85	4. 77	11. 42	15. 00	−8. 78	7. 87	43. 84	—	10. 95	64. 72	172. 60	—	14. 4	23, 616	23, 497	0. 08

*積み立ては税引き前分配金再投資、計算月数分を運用したものとする。例えば1年の場合は2021年5月末に1万円で 積み立てを開始し、2022年4月末投資分までの5月末における運用成果とする（5月の積み立て額は入れない）。
出所：MorningstarDirect のデータを用いてイボットソン・アソシエイツ・ジャパンが作成。MorningstarDirectについてのお問い合わせはイボットソン・アソシエイツ・ジャパンのお問い合わせメール(https://www.ibbotson.co.jp/contact-us/)にてお気軽にご送信ください。

Copyright ©2022 Ibbotson Associates Japan, Inc.